なごや学生社会課題解決プログラム

成果報告会
Spark!

2024/12/22(Sun) 13:00～16:30
@NAGOYA INNOVATOR'S GARAGE

協賛　名古屋銀行　明治安田　協力　愛知県弁護士会　大日本ダイヤコンサルタント株式会社

主催　名古屋市

成果報告会　次第（13:00～16:30）

はじめに……原コーディネーター
あいさつ(中田副市長)……名古屋市
活動報告にあたって……原コーディネーター
活動報告プレゼンテーション
・**課題②広げたい　民生委員と地域の輪**（健康福祉局 地域ケア推進課）
　【発表チーム】MSK　／　ONEチーム　【コメント】武田担当局長
・**課題①“住みやすい名古屋”でプロデュースせよ**（総務局 企画課 ｼﾃｨﾌﾟﾛﾓｰｼｮﾝ推進担当）
　【発表チーム】まるはち　／　ぴーぴー（仮）　【コメント】株式会社名古屋銀行
・**課題④参加したくなる子ども会を目指して**（子ども青少年局 青少年家庭課）
　【発表チーム】チームFLAT ／　こいのぼり　【コメント】愛知県弁護士会
・**課題③スポーツで名古屋を若者の交流拠点に**（スポーツ市民局 スポーツ戦略課）
　【発表チーム】チーム坂道　／　チームカメレオン　【コメント】明治安田生命保険相互会社
クロージングワークショップ……原コーディネーター
企業賞・ベストスパーク発表……名古屋市
総括コメント（中田副市長）……名古屋市

「学生による社会課題解決プログラム」って？

名古屋市が抱える社会課題・行政課題の解決に向けて、公募により結成された学生のプロジェクトチームが市の関係部署と連携しながら活動を行うプログラム。各チームの活動にはコーディネーターがサポートに入り、大学の枠を超えたメンバーがアイデアを出し合いながら、チームで課題解決に向け取り組みました。

○活動期間
令和6年8月～令和6年12月

○参加人数
40名

プログラムの歩み

月	活動内容
8	○プレキックオフイベント（8/8） ○キックオフイベント(8/28) ○活動開始
9	※活動期間中は、チームごとに随時、担当課やコーディネーターとのミーティング、フィールドワーク等を実施
10	・中間報告会（10/26）
11	・特別セミナー（11/19）（効果的な伝え方）
12	○成果報告イベント(12/22)

なごや学生社会課題解決プログラム　課題②活動報告サマリー

テーマ　広げたい　民生委員と地域の輪

担当課　健康福祉局 地域ケア推進課

現状・背景

民生委員を知っているだろうか？民生委員は福祉や子育てに関する困りごとの相談に乗り、必要な支援につないでくれる身近な存在だ。だが、いま民生委員が足りない。活動内容ややりがいを知ってもらい、民生委員として活動してみたいと思う人を増やすためにはどうしたら良いだろうか。

担当チーム

チーム名

MSK

メンバー

飯田　哲太、加藤　あかり
平岡　優佳、松橋　悠聖

チーム名の由来

民生委員を（M）
知ってもらう（S）
活動（K）

略して「MSK」です！

活動の経過

- ✓ 民生委員のことを知るために、御器所学区のサロンに参加したり、昭和橋学区の見回り訪問に同行。サロンの参加者や地域の方、民生委員にインタビューを実施。
- ✓ 民生委員のリアルを知り、活動が担い手不足の根本的解決につながらないのではと考え、改めて目標を再設定。
- ✓ 「誰もが不安や悩みを相談できる地域」を最終目標とし、その第一ステップとして民生委員の認知度向上策を検討、実施。

提案の骨子

① 『誰もが不安を抱かない、将来困ったら頼れる地域』を理想の地域として設定し、そのファーストステップとして民生委員の認知度向上を目標に設定。

② 民生委員の認知度向上を目指し、SNS（Instagram、Facebook、X、Youtube、TikTok）で動画を作成し発信。動画の効果測定のためにアンケートを実施し分析。

③ 次のステップに向けて、さらなる認知度向上、人手不足の解消など具体的な取り組みについて提案。

活動の様子

なごや学生社会課題解決プログラム　課題②活動報告サマリー

テーマ　広げたい　民生委員と地域の輪

担当課　健康福祉局 地域ケア推進課

現状・背景

民生委員を知っているだろうか？民生委員は福祉や子育てに関する困りごとの相談に乗り、必要な支援につないでくれる身近な存在だ。だが、いま民生委員が足りない。活動内容ややりがいを知ってもらい、民生委員として活動してみたいと思う人を増やすためにはどうしたら良いだろうか。

担当チーム

チーム名

ONEチーム

メンバー

奥谷　祐麻、鈴木　見空
津山　和花、山下　未桜

チーム名の由来

チームメンバーの仲の良さとともに同じ目標に向かって取り組もう！という姿勢を表現しました。

活動の経過

- ✓ 民生委員が主催しているサロン、給食会、演奏会等に参加すると同時に民生委員へのヒアリングを実施。
- ✓ 民生委員へのヒアリングから得た体験談をもとに、民生委員が成長していくストーリーのすごろくを作成。並行してインスタグラムを活用して情報発信を開始。
- ✓ 作成したすごろくを活用したワークショップを小学生に対して2度開催。参加した小学生だけでなく、参加後にも認知度が広げられる工夫を追加。

提案の骨子

① フィールドワークを通じて得たゴールイメージ「『民生委員って私たちに関係あるの？』というイメージを払拭させる」。

② すごろくを活用したワークショップの実施や、インスタグラムでの発信を通じた認知度向上の取り組み。

③ 取り組みを通じて得られたことから「みんなで民生委員になる社会を目指す」ことを提案。

活動の様子

なごや学生社会課題解決プログラム　課題①活動報告サマリー

テーマ　“住みやすい名古屋”でプロデュースせよ

担当課　総務局 企画課 シティプロモーション推進担当

現状・背景

若い世代の東京・大阪・福岡への転出が止まらない。このままだと、名古屋が持続的に成長していくのが難しくなるだろう。どうしたら、名古屋に住みたいと思う？働きたいと思う？戻ってこようと思う？君たちに選ばれるまちになるために、この名古屋をどう魅せるか。

担当チーム

チーム名

まるはち

メンバー

阿部　洋鷹、加藤　潤一、加藤　諒太朗
鎌野　夏帆、河合　晴香、成瀬　悠衣

チーム名の由来

名古屋市の市章にちなんで、名古屋への愛着を感じられる『まるはち』に興味を持ってもらえそうということで決めました。

活動の経過

- ✓「名古屋の住みよさ」をテーマとして設定。住みよさを感じるかは、人によって違うと定義。
- ✓「名古屋を活気あふれ愛されるまちにしたい」を自分たちの目指す姿として設定。
- ✓未来の住民である学生をターゲットにし、学生の声を聞くために、名古屋市内の大学でアンケートを実施し分析。

提案の骨子

① 「未来の住民」である学生の声を聞くために、名古屋市内の大学を対象に、市内在住・市外在住別にアンケートを実施。

② アンケートの分析結果から、名古屋には学生のニーズに応え得るポテンシャルがあるが、十分に伝えられていない。

③ より幅広い名古屋の魅力を再発見し、地元市民目線のミクロな「住みよさ」を発信する取り組みについて提案。

活動の様子

なごや学生社会課題解決プログラム　課題①活動報告サマリー

テーマ　“住みやすい名古屋”でプロデュースせよ

担当課　総務局 企画課 シティプロモーション推進担当

現状・背景

若い世代の東京・大阪・福岡への転出が止まらない。このままだと、名古屋が持続的に成長していくのが難しくなるだろう。どうしたら、名古屋に住みたいと思う？働きたいと思う？戻ってこようと思う？君たちに選ばれるまちになるために、この名古屋をどう魅せるか。

担当チーム

チーム名

ぴーびー（仮）

メンバー

棚橋　優子、寺田　祥太、中西　祐也
浪崎　巧己、宮島　樹、吉川　玲央

チーム名の由来

仮の略称であったアルファベットBを分解して小文字のpとbをチーム名に。活動の中でチーム名を変更する予定で(仮)を付けたまま活動しました。

活動の経過

- ✓他都市の情報も含めて、名古屋市の現状を「住みやすい」というキーワードで整理。ポテンシャルとイメージのギャップに着目。
- ✓大学生に対して名古屋の魅力を再発見するためのアンケート実施し、その結果を分析・考察。
- ✓参加者が名古屋の魅力を再発見する短時間のワークショップを企画してトライアル開催。

提案の骨子

① 人生の岐路に立つ高校生・大学生といった若者に、名古屋市の住みやすさを伝えることができれば、とどまってくれる人も増えるのではないか、という仮説を立案。

② 大学生を対象としたアンケート結果やワークショップの実施により得られたキーワード「ちょうどよさ」の考察。

③ 「ちょうどよさ」を重視した名古屋の魅力発信について、具体的な取り組みを提案。

活動の様子

なごや学生社会課題解決プログラム　課題④活動報告サマリー

テーマ　参加したくなる子ども会を目指して

担当課　子ども青少年局 青少年家庭課

現状・背景

身近な地域での子ども同士の交流の場となっている子ども会の減少傾向が続いている。コロナ禍を経て、子どもの体験活動の機会が減少していると言われる今だからこそ、子ども会活動が果たす役割は大きい。進んで参加したくなる魅力的な子ども会を目指すには、どういった活動を実施すべきだろうか。

担当チーム

チーム名

チームFLAT

メンバー

石川　綾華、伊藤　あかり、伊藤　瑞紗
小川　鈴奈、豊田　航太郎、畑本　よつ葉

チーム名の由来

みんな「FLAT」に話し合えるチームに！という願いを込めてチーム名にしました。

活動の経過

- ✓ 子ども会に関する過去のアンケート結果等をもとに、子ども会への加入率が低いことの背景や要因について分析。
- ✓ 3か所のフィールドワークを実施し、保護者や子どもたちからたくさんの声を聴取。
- ✓ ターゲットを緑区に設定し、子ども会加入者・関係者の声を反映した子ども会案内チラシ案を作成。さらに全区で活用できるチラシのテンプレート案を作成。

提案の骨子

① 子ども会の加入率が低い理由のうち、活動の魅力が伝わっていない点に着目し、みんなの声を多くの人に届ける、興味を引くPRの作成に目標を設定。

② フィールドワークで得た保護者や子どもたちの声を反映した緑区版子ども会の案内チラシ案を作成。さらに全区で使える子ども会案内チラシのテンプレート案を作成。

③ 今後の展望として、作成したチラシ案・テンプレート案を活用して子ども会の活動の魅力を広く届けることを提案。

活動の様子

なごや学生社会課題解決プログラム　課題④活動報告サマリー

テーマ　参加したくなる子ども会を目指して

担当課　子ども青少年局 青少年家庭課

現状・背景

身近な地域での子ども同士の交流の場となっている子ども会の減少傾向が続いている。コロナ禍を経て、子どもの体験活動の機会が減少していると言われる今だからこそ、子ども会活動が果たす役割は大きい。進んで参加したくなる魅力的な子ども会を目指すには、どういった活動を実施すべきだろうか。

担当チーム

チーム名

こいのぼり

メンバー

泉田　絢花、梅本　泰希、川口　燦月
香田　彩佳、服部 美希奈

チーム名の由来

こいのぼりは子どもが困難を乗り越えて成長する鯉を表す。子ども会が課題を乗り越えてより良いものとなる提案を出そうという意味を込めました。

活動の経過

- ✓ 子ども会に関する理想と現実のギャップ分析を行い、解決策の仮説を立案。
- ✓ 自分たちの理想の子ども会像をよりクリアにし、子ども会利用者のペルソナを設定して、解決策の仮説を具体化。
- ✓ 実際の子ども会行事を視察し、子どもたちや親御さん、ボランティアスタッフなどにインタビューを実施。

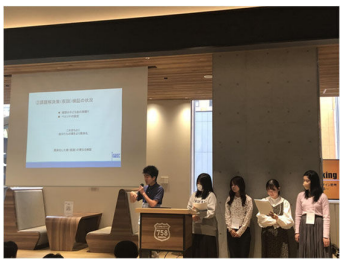
提案の骨子

① 魅力的な子ども会を目指すための４つの取り組みの提案。「アシストバンクの改善」「学生ボランティア」「子どもが主体的に企画できるイベント」「親同士＆地域がつながる場をつくる」。

② 各提案について、自分たちの分析やインタビュー結果やをもとに、具体的に説明。

③ ４つの具体策を通じて、「親は気軽に、子どもは主体的に、地域のつながりはより深く」という子ども会の未来を提案。

活動の様子



なごや学生社会課題解決プログラム　課題③活動報告サマリー

テーマ　スポーツで名古屋を若者の交流拠点に

担当課　スポーツ市民局 スポーツ戦略課

現状・背景

若い世代の注目を集めるアーバンスポーツだが、市内では大会・イベント実績が少なく、2年後のアジア競技大会に向けて一層の盛り上がりが必要である。アーバンスポーツを通じて若者に名古屋への誇りや愛着を持ってもらい、名古屋が若者の交流拠点となるためには、どのような取り組みが必要だろうか。

担当チーム

チーム名

チーム坂道

メンバー

市川　七帆、木村　直哉
佐藤　沙羅、森本　裕介

チーム名の由来

「スケートボードとかBMXって、傾斜のあるところ（＝坂道）でやっているイメージがあるよね」というところからチーム名にしました。

活動の経過

- ✓ 「アーバンスポーツ」の知名度・認知度を確かめるための調査を企画。質問の内容、調査対象、回収方法等を検討。
- ✓ イベント会場、児童館での対面でのアンケートや聞き取り、大学生を対象にしたウェブアンケートを実施しその結果を分析。さらに、プロのBMXライダーへのインタビューを実施。
- ✓ アンケートの分析結果とプロのBMXライダーへのインタビューの結果から、効果的なイベント内容だけでなく、環境整備も含めた解決策を検討。

提案の骨子

① アーバンスポーツの知名度・認知度の現状をつかむためにイベント会場や児童館でのアンケートや聞き取り、プロのBMXライダーへのインタビューを実施。

② 実施したアンケートやインタビュー等の結果をふまえ、SWOT分析を実施、SWOT各要素のクロス分析による提案。

③ アーバンスポーツが今よりも身近に、そして人々の交流のきっかけになることを目指して、具体的な3つの取り組みを提案。

活動の様子

なごや学生社会課題解決プログラム　課題③活動報告サマリー

テーマ　スポーツで名古屋を若者の交流拠点に

担当課　スポーツ市民局 スポーツ戦略課

現状・背景

若い世代の注目を集めるアーバンスポーツだが、市内では大会・イベント実績が少なく、2年後のアジア競技大会に向けて一層の盛り上がりが必要である。アーバンスポーツを通じて若者に名古屋への誇りや愛着を持ってもらい、名古屋が若者の交流拠点となるためには、どのような取り組みが必要だろうか。

担当チーム

チーム名

チームカメレオン

メンバー

上山　愛裕、恩田　絢、榊原　弘己
塩見　歩里、中西　亮人

チーム名の由来

大学、学年、得意なことや性格も違う5人の個性を活かせば、何色にでもなれる。お互いの意見を尊重しあえるチームを目指しました。

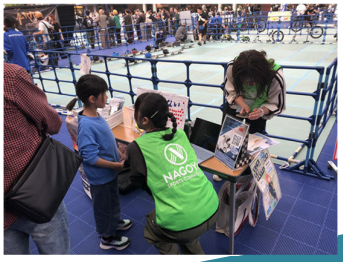
活動の経過

- ✓ アーバンスポーツの普及に関する理想と現実のギャップ分析を行い、解決策の仮説を立案。
- ✓ イベントの場などを活用し、イベント告知動画の制作・配信と、市民のアーバンスポーツに対する意識や行動についてのアンケートを実施。
- ✓ BMXのアマチュアライダーの協力のもと、市内児童館においてアーバンスポーツの観覧イベントを企画・実施し、参加者や職員に対してアンケートやヒアリングを実施。

提案の骨子

① 仮説①「SNSショート動画は情報発信・告知手段として有力」についての効果検証。

② 仮説②「子供向けイベントの開催はアーバンスポーツを身近に感じるきっかけになる」についての効果検証。

③ アーバンスポーツで名古屋を交流拠点にする第一歩として、アーバンスポーツに触れる機会を増やす取り組みと情報を効果的に発信することを提案。

活動の様子